

豪州での室内環境学関連の学会活動と関連研究の動向など
第4回：室内環境に関連する学協会

伊藤一秀

九州大学総合理工学研究院
〒816-8580 福岡県春日市春日公園6-1Recent trends of academic activities related to indoor environmental studies in Australia
Part 4: Academic Societies/Institutes related to Indoor Environment in Australia

Kazuhide ITO

Interdisciplinary Graduate School of Engineering Science, Kyushu University
6-1 Kasuga-koen, Kasuga, Fukuoka, 816-8580 Japan

豪州は日本の国土面積の約20倍という広大な土地に日本の人口の約1/5となる2500万人が住む。豪州の一人当たりのGDPは約50,000USD(2016年)であり、我が国の約40,000USD(同年)と比較すれば、豪州人の一人当たりの生産性は我々のそれよりも25%程度高いことになる。広大な土地に少ない人口という境界条件のため、行政や民間サービスにおいても合理化が進んでおり、ネット決済によるキャッシュレス化、電子サービス化が(日本よりは)浸透している。

豪州での室内環境学関連の学協会に関しても、我が国の様に多少の守備範囲を変えながら多くの学会や協会が乱立している状況とは異なり、一定の合理性を保ちながら必要となる組織が必要に応じて適宜維持されているように感じる。特に、英語圏であることのアドバンテージを最大限に活用し、国際的な組織とうまく共存しながらその一翼を担う、というスタンスが豪州の基本的な姿勢と思われる。

本稿では、豪州での室内環境学関連の学協会の事情を紹介する。先の報告にも書いたが、豪州事情は知人の環境コンサルタントDr. Vyt Garnys (CETEC)とRMITの同僚であるDr. Kiao Inthavongからの情報を中心に、念のためにネット検索にて情報を補完したものである。

我が国の室内環境学関連の学協会といえば、室内環境学会の他、日本建築学会、空気調和・衛生工学会、冷凍空調学会、空気清浄協会などが思い浮かぶ。

会員規模も数万人から数百人まで様々である。アメリカ暖房冷凍空調学会ASHRAE (American Society of Heating, Refrigerating and Air-Conditioning Engineers)の日本支部もあるが、空気調和・衛生工学会(正会員数は15,000名程度)や冷凍空調学会(同4,000名程度)と比較すれば活動や会員の規模は格段に小さく、その存在感は薄い。豪州はと云えば、例えばこの地の建築学会はAustralian Institute of Architectsであり、我が国でいうところの建築家協会のようなもので、特に室内環境学関連分野を守備範囲とはしていない。Dr. Vyt Garnysによれば、豪州での室内環境学に関連する組織は以下の二つの学協会くらいだろう、とのこと。

(1) Indoor Air Quality Association of Australia (www.iaqaustralia.org.au)

この協会はカナダに本部のあるIndoor Air Quality Association (IAQAと略称)の支部であり、豪州独自の組織ではない。IAQAはIAQに関連する業界団体という側面が強く、アカデミアとの関係は(我が国の室内環境学会などと比較すれば)希薄である。2015年に米国ASHRAEと提携することで、室内空気質ならびに空気調和関連業界団体との連携、規基準作成や標準化業務、関連アカデミアとの連携を強化している。米国ASHRAEはあまりにも巨大で強大であるため、今後のIAQAの独自性確保が怪しまれるような気もするが、生き残りを考えると必然なのかもしれない。

IAQA豪州支部は、Chapter Directorを含めたボードメンバーが6名、その他の会員は数十名(?)、の非常に小さな組織であり、たまに講習会などを開催して細々と活動を維持している様子であった(Dr. Vyt曰く、この組織はquite modest in size and activityとのことで、開店休業状態に近い様子)。

ちなみにASHRAEの豪州支部というものは存在し無い。

(2) Australian Institute of Refrigeration Air Conditioning and Heating (www.airah.org.au)

1920年設立の非常に長い歴史を有する豪州の空気調和冷凍学会でAIRHRと略称。この学会も米国ASHRAEと連携している。正会員数が2,727人、企業会員数が33社(2017年時点での情報)の比較的規模の大きな学会であり、豪州の空気調和関連技術動向に関する年次発表会や関連行事を多数開催している。我が国の空気調和・衛生工学会や冷凍空調学会の豪州版といった位置づけと推察され、空気調和技術や冷凍技術に関する主に“機械系”を守備範囲としている。その中で、主要分野とは言えないものの、一分野として室内環境も扱っているようである。

これら二つの学会の他、例えば、Green Building Council of Australia (GBCA)やAustralian Sustainability Built Environment Council (ASBEC)といった、最近流行りの環境格付けをオーソライズする組織ももちろん存在するが、室内環境を包括的に扱う学術組織ではない。非常に主観的な感想であるが、我が国日本や、北欧、その他の欧米諸国と比較して、豪州の室内環境関連学協会の活動は非常にmodestであり、対応して関連研究者も多くない。いろいろな意味で非常に豊かな豪州で生活してみると、然もありなん、と思う。

新しい組織を立ち上げることには非常に多くの困難と努力が求められるが、既存組織の廃止には、それ以上の労力が要求されることも多い。定常的な人口減がロックインされている我が国は、撤退戦を戦う覚悟とその準備が求められている。研究者や技術者の数、関連企業の数と比較して、我が国の室内環境を扱う学協会の数は多すぎるのではなかろうか。一部の真面目な学会員が過剰な学会雑務を(複数)抱えてパンクする前に、戦略的に統廃合して合理化できないものだろうか、と不真面目な学会員が心配する。